重点目標	共通項目	具体的取組	主担当	現状 (H26年度結果)	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	達成度(A+B)%	判定	年度後半の方針・方策
1. 学力向上と教育指導力向上		①基本的な学習ルールの定着	生徒指導部	学校全般にわたり、ほぼ身につけている。2学期になり、学年によっては心の緩みが見られた。学習ルールを常に意識させるために掲示の工夫をしたり、相互授業参観で意識を高めたりしていかなければならない。月1回、学校統一の筆箱点検日を設け、筆記用具をきちんと揃える取り組みを行ったりしてきた。	学年に応じた学習ルールが身に付いている	A: 90%以上の児童ができる B: 80%以上の児童ができる C: 70%以上の児童ができる D: 70%未満の児童ができる	<職員評価>①② 82% <児童評価>③ 77% <保護者評価>③ 85%	B	学習マナーの再確認と繰り返し指導を行い、一人一人が意欲的に学習に取り組める姿勢を身につける。また、筆箱点検を行い、学習に集中できる環境作りをする。さらに、児童を引きつけられる活動や1時間の流れを工夫し、生徒指導の3機能を生かした学習を行う。
		②繰り返し指導による漢字力や計算力の定着 (朝学習・パワーアップタイム・宿題等による補充学習の継続的取組)	学習部	全校統一漢字・計算テストでは、昨年度に比べ、格段に100点の割合が増えた。練習のさせ方と出題の仕方や賞賛の工夫などで向上意欲が高まったことや朝学習やパワーアップタイムで基本的な計算や漢字練習をくり返し行ってきた成果と考える。現在、パワーアップタイムは10分間で完結する計算・漢字問題であるが活用問題の導入など検討していきたい。	当該学年の漢字や計算が身に付いている	目標値 低学年90点以上 中学年85点以上 高学年80点以上 A: 目標値90%以上 B: 目標値80%以上 C: 目標値70%以上 D: 目標値70%未満	<職員評価>③ 100% <児童評価>⑥ 94%	A	テストの事前の取り組みにより、7月のテストでは漢字で約72%、計算で約47%とさらに100点を取れる児童が増えてきた。事前の取り組みを工夫して、少しずつ難易度を上げながらも100点をねらわせ、目標値100%達成をめざす。そして、やればできるという自信や達成感を持たせていく。
	◎	③表現する力の育成 (書くこと)	学習部	毎週の朝学習の「ちょこっと作文」を書く活動により書くことに抵抗感がなくなってきた。授業中の書く場面でも書くことが充実してきた。また、ベスト作文を全校で紹介し、良い作品に触れられるようにしている。作文指導で各学年で出された条件やテーマを一覧表にして、取り組みを参考にしている。今後もテーマや条件を工夫し、継続していきたい。	自分なりの考えを書くことができる	A: よくあてはまる (90%以上) B: だいたいあてはまる (80%以上) C: あまりあてはまらない (70%以上) D: まったくあてはまらない (70%未満)	<職員評価>④ 86% <児童評価>④ 89%	B	ちょこっと作文を継続していく中で、言葉のカードを活用したり、よい作品を紹介したりして語彙を増やし、表現力の向上につなげていく。
	◎	④表現する力の育成 (半具体物や言葉・数・式・図などを用いて、自分の考えを話す)	学習部	話し合い活動の共通実践により、理由をつけて話すことが定着してきた。聞き手に分かりやすく話すために、黒板の前に出て図などを指し示す姿も見られる。今後も、話し合いの場面で、聞き手に伝えることを大切に取り組んでいきたい。詩の暗唱では、5月から継続し全員合格している。詩・ことわざ・英文・百人一首などテーマを工夫し、今後も表現力育成のために、続けていきたい。	自分の考えを根拠を示しながら話すことができる	A: 80%以上の児童ができる B: 70%以上の児童ができる C: 60%以上の児童ができる D: 60%未満の児童ができる	<職員評価>⑤ 100% <児童評価>⑤ 82% <保護者評価>④ 73%	B	自分の意見を言う時には、理由をつけて話すことができるようになってきている。しかし、発言意欲や内容には個人差が大きいので、良い聴き方ができる児童を認め、聴き手を育てることで、話す意欲や内容を高めていく。
	◎	⑤家庭学習の充実と習慣化 (学年×10分の定着)	学習部	家庭学習強化週間を設け、根気よく声かけをした結果、家庭学習は定着してきた。内容の充実した自学ノートを、ほれぼれ賞として児童玄関前に掲示するなど自学を推奨してきた。そのことにより、家庭学習の量や時間が増えてきた。今後も、自学ノートの整理の仕方や内容など広め、さらに定着させていきたい。	毎日、決められた時間の家庭学習を行っている	学年×10分として A: 90%以上の児童ができる B: 80%以上の児童ができる C: 70%以上の児童ができる D: 70%未満の児童ができる	<児童評価>⑦ 84% <職員評価>⑥ 86% <保護者評価>⑤ 69%	B	きちんと習慣付いている児童が増えてきているもののそうでない児童もいる。粘り強い声かけや励みになる評価、連絡帳のチェックなどの日常の取り組みと家庭学習強化週間により、保護者の協力を得ながら取り組んでいく。
	◎	⑥読書量目標値の設定と到達促進の取り組み (児童委員会活動、教職員や司書による本の紹介、読書カード等)	学習部	読書活動推奨の取り組みで、たくさんの本に興味を持ち、本を読む習慣が全校的についている。読み聞かせ読書や朝読書などは意欲的な様子である。また、読書量の増えない児童もいる。図書館司書と連携していきながら、本の紹介などを行い、本のおもしろさの全体的な呼びかけや個人的な働きかけを根気よくしていきたい。	読書量の目標値を設定し、到達のための手立てが工夫されている	目標値 1~3年生 年間80冊以上 4~6年生 年間5,600ページ以上 A: よくあてはまる (90%以上) B: だいたいあてはまる (80%以上) C: あまりあてはまらない (70%以上) D: まったくあてはまらない (70%未満)	<職員評価>⑦ 75% <児童評価>⑧ 94%	B	新幹線読書の取り組みや朝読書、読み聞かせの継続により、図書室の貸し出し冊数は95%の児童が目標に達することができた。各クラスでの取り組みを工夫し、読書が苦手な児童への働きかけなども行って100%達成をめざす。
	◎	⑦授業における タイムマネジメント	学習部	学習展開の中でまとめを行うこと、適用題で学習を定着させるという意識が高まってきた。授業づくり診断表の活用で授業分析が明確になり、ポイントを絞った授業が行われるようになったからである。今後も、授業の山場を意識し、適用題で習熟が図れるようにしていきたい。また、授業づくり診断表や週案を活用して、1時間1時間、ねらいを達成する授業展開に努めたい。	学習展開のまとめまで到達している	A: よくあてはまる (90%以上) B: だいたいあてはまる (80%以上) C: あまりあてはまらない (70%以上) D: まったくあてはまらない (70%未満)	<職員評価>⑨ 86%	B	職員の意識が高まり、適用題までを1時間の流れに組み込めるようになってきた。ねらいを明確にし、課題から適用題までの内容がねらいからそれないように、学習計画を立てて取り組んでいく。

	◎ ⑧校内研修の充実 (外部指導者招聘, 校内研究会の活性化, 相互授業参観, 外部研修への積極的参加と還元等)	学習部	金沢教育事務所などの指導主事の指導を受け, 充実した校内研究会を持つことができた。授業整理会では, 授業の成果や課題を整理して, 深まりを持たせていきたい。研究授業後, 研究だよりを発行し, 共通理解を図ることができた。研究を進める上で共通実践することと研究することを分けて捉え, 指導にあたりたい。今後も, 授業作り診断表や週案の記入について改善を続けていく。	校内研修を通して, 授業力向上に取り組んでいる	A:よくあてはまる (90%以上) B:だいたいあてはまる (80%以上) C:あまりあてはまらない (70%以上) D:まったくあてはまらない (70%未満)	<職員評価>⑧⑩ 87%	B 研究授業の整理会の話し合いをもとに, 研究内容を深め, 次の研究授業に活かすことができた。日々の授業の中でアタックポイントとした共通実践に取り組み, 授業力を磨いていく。
	◎ ⑨各種学力テスト結果を生かした学力向上の取り組み (4月:国, 県, 町学力調査 12月:町学力調査)	学習部	テスト実施後, 全職員で自校採点を行った。分析する際に, 問題を解答し, 難易度を確認した。年間指導計画や週案に弱点箇所を書き込み, 重点的な指導に取り組んだ。学期末や学年末に過去問などを使いまとめ学習を行った。テスト前には, 弱点項目について定着学習を行った。今後も一人一人の学習到達状況を把握して指導をしていく。	各種学力テスト結果を生かした学力向上の取り組みを積極的に行っている	A:よくあてはまる (90%以上) B:だいたいあてはまる (80%以上) C:あまりあてはまらない (70%以上) D:まったくあてはまらない (70%未満)	<職員評価>⑪ 88%	B 学力テストの分析から, ポイントとなる内容や弱点について, 日々の授業の中で意識して取り組み, 朝学習やパワーアップタイムを効率よく活用して, 全教科県平均以上をめざす。
	◎ ⑩情報機器を活用した授業実践	情報担当	タブレットPCの簡単な操作や授業実践例を紹介したところ「まずは使ってみる」という意識が出てきた。実践のシートの書き込み, 授業実践例のストックなど互いに見合い, さらに意識が向上した。今後, 授業での活用を増やすためには, PCサポーターの教材開発支援が必要である。サポーターの活用方法や連絡体制の見直しを図っていく。	情報機器を授業に活用している	A:よくあてはまる (90%以上) B:だいたいあてはまる (80%以上) C:あまりあてはまらない (70%以上) D:まったくあてはまらない (70%未満)	<職員評価>⑫ 75%	C 夏季研修会やPCサポーターとの連絡体制強化により, 情報機器や活用方法について学び, 知識をためることができた。今後, タブレットPC以外の情報機器の使用基準を設けることで, 活用に対する意識向上を図っていく。
2. 豊かな心と社会性の育成	①その場に応じた正しい言葉づかい, 思いやる言葉づかいの育成	生徒指導部	全体的には正しい言葉遣いをする児童が増えてきた。授業での発表の仕方, 職員室への入り方, 上級生の下級生に対する声かけの仕方など, 相手を思いやり, 場に応じた言葉遣いができてきた。しかし, 一部に友達同士の言葉遣いが乱暴になりやすい児童も見られる。今後も, 相手を意識して, 思いやる言葉遣いを指導していく。	場に応じた正しい言葉づかい, 思いやる言葉づかいがきちんできている	A:90%以上の児童ができる B:80%以上の児童ができる C:70%以上の児童ができる D:70%未満の児童ができる	<職員評価>⑬ 62% <児童評価>⑨ 79% <保護者評価>⑧ 81%	C よい言葉や思いやりのある言葉をシャワーのように繰り返し使うよう指導する。正しい言葉づかいをすることの良さを感じられるようにする。また, 学校での指導を学校便りなどで発信し, 家庭への協力をお願いする。
	◎ ②いじめのない温かい学級活動づくり	生徒指導部	全職員が人間関係づくり年間指導計画を活用するようになった。いじめのきっかけになる子ども同士のトラブルなどは, その場で解決し, 未然予防に努めている。今後も, アンケートや個人面談を定期的に実施し, 一人一人の抱え込んでいる思いを引き出し, 悩みの早期発見・早期解決・未然防止に努めていく。	「人間関係づくり年間指導計画」を活用している	A:よくあてはまる (90%以上) B:だいたいあてはまる (80%以上) C:あまりあてはまらない (70%以上) D:まったくあてはまらない (70%未満)	<職員評価>⑭⑮ 79% <児童評価>①⑩ 84% <保護者評価>①⑨ 94%	B 人間関係づくり年間指導計画を再確認し, 年間計画をもとに人間関係づくりのためにエンカウンターやアサーションを行い, 一人一人が人との関わりを大切にできるような学級づくり・学校づくりをしていく。
	◎ ③主体的に取り組む特別活動	特別活動担当	異学年交流において, 高学年から低学年へ優しい言葉かけやお世話を意欲的に行う場面が増えてきた。低学年から高学年への言動は, もう少し改善を図りたい。そのため, 毎月一回のなかよしタイムや縦割り班活動を通し, 異学年交流のよさである助け合いや支えあいを双方向で意識させたい。振り返りを行う場の設定, 成果物の発表・掲示の場を増やしていく。	ねらいに沿って主体的によりよい学校生活を築こうとする態度の育成に努めている	A:よくあてはまる (90%以上) B:だいたいあてはまる (80%以上) C:あまりあてはまらない (70%以上) D:まったくあてはまらない (70%未満)	<職員評価>⑯ 88% <児童評価>⑫ 94% <保護者評価>⑩ 100%	A 高学年が計画性をもって活動に取り組むことで, 給食や清掃, 児童集会等で積極的に関わり合う姿が見られた。さらに異学年交流のよさを実感させるため, 活動前に関わり方の指導や言葉掛けの指導を高学年に行うことで, 主体的によりよい学校生活を築こうとする態度を育てていく。
	◎ ④別業を活用し, 重点項目を意識した統一的な道徳	道徳担当	2学期の授業参観で, 全校一斉に重点項目の授業を行った。それに合わせて日頃の生活の中で事前指導できた。保護者にもゲストティーチャーや授業参加を依頼し, 家庭への啓蒙を図った。道徳便りで生活の中の道徳教育や, 保護者を巻き込んだ授業, 私たちの道徳の活用を呼びかけた。学校便りで本校の道徳授業について知らせた。今後は, 道徳教育の啓蒙を行うと共に, 私たちの道徳も授業に取り入れ, 年間計画や別業を見直していく。	重点項目を意識した道徳授業を行っている	A:よくあてはまる (90%以上) B:だいたいあてはまる (80%以上) C:あまりあてはまらない (70%以上) D:まったくあてはまらない (70%未満)	<職員評価>⑰ 86%	B 道徳便りの発行や掲示等で学期ごとの重点目標を共通理解できたことで, 授業を行う上で意識するようになってきた。さらに意識を向上させるために, 別業を簡易化したものの配布, ゲストティーチャーの招聘の補助, 学校ホームページへの掲載等の具体的な取り組みを提案していく。

			⑤個別の指導計画や教育支援計画の作成と有効活用	特別支援コーディネーター	児童理解の会で支援の必要な児童の様子や手だてについて具体的に紹介され、共通理解ができた。今後も実態把握をきめ細かく行い、支援が必要な児童へのこまめな対応を行っていく。また、特別支援学校相談員を要請し、専門的な立場からの助言を受け、より個に応じた支援を行うと共に専門的な内容についての研修を深めていく。	個別の指導計画や教育支援計画を作成し、有効活用している	A：よくあてはまる (90%以上) B：だいたいあてはまる (80%以上) C：あまりあてはまらない (70%以上) D：まったくあてはまらない (70%未満)	<職員評価>⑮ 100%	A	児童理解の会で支援の必要な児童の様子や手だてについて共通理解を図った。また、特別支援学校相談員を要請し、専門的な立場からの助言をしていただいた。今後も、それらをもとにきめ細かな対応を全職員で行っていく。
3. 健やかな体と危機管理の育成			◎①早寝・早起・朝食の定着	保健安全部	「健康スッキリ調査」の結果から随時睡眠について、全体・個別指導を実施している。しかし、スポーツ教室・塾やテレビ視聴等で就寝時刻が遅くなる傾向にある。各家庭の意識差があり、なかなか定着しない。繰り返し、全体及び個別指導を実施し「子育ては脳育て」を合い言葉に基礎的生活習慣定着の啓発を児童・保護者に行っていく。	早寝早起朝食の習慣が身に付いている	A：90%以上の児童ができる B：80%以上の児童ができる C：70%以上の児童ができる D：70%未満の児童ができる	<児童評価>⑬ 89% <職員評価>⑰ 100% <保護者評価>⑦ 85%	B	健康スッキリ調査や健康パワーアップ大作戦で「早寝・早起・朝食」について啓発してきた。なかなか身につかない児童には個別指導を行った。今後はさらに意識が高まるよう、規則正しい生活の大切さについて全体指導を行うとともに、すこやか集会等を通して家庭への協力を呼びかけていく。
			◎②体力・運動能力調査の実施・分析・取組	体育担当	体育の準備運動にスポチャレ3種目を取り入れ、全校で取り組んだ。その結果を掲示していくことで、各学級が意識し合い、意欲的な活動につながっていった。学年目標を「スポチャレゴールド」と設定することで、目標に向けて学級全体で取り組む姿が見られた。今後も、取り組みの場、記録の掲示、目標、記録の設定、成績への賞賛などに工夫を凝らしていく。	体力・運動能力調査による課題の取り組みを行っている	A：よくあてはまる (90%以上) B：だいたいあてはまる (80%以上) C：あまりあてはまらない (70%以上) D：まったくあてはまらない (70%未満)	<職員評価>⑳ 100%	A	スポチャレいしかわでは、8の字・40m・シャトルボールの記録で、全学級がブロンズ以上をめざして挑戦する。1校1プランである「アジリティプラン」も体育授業の中に組み込みながら、本校の課題である「敏捷性」の向上を図り、反復横跳びの記録が県平均を上回れるようにする。
			◎③事故の未然防止に努めると共に、事故発生時における教職員相互の連携による迅速な組織的対応	保健安全部	日常のけがなどに迅速に対応できるよう応急処置の研修会を行った。水泳事故発生時の救護訓練も行った。地震や火災の避難訓練で、基本行動は身につけてきた。そこで、様々なケースを想定し、清掃時の避難訓練を行った。児童は学校の多様な場所からの避難経路を知ること、教職員も経路や連携の確認ができた。引き渡し訓練では、保護者との連携が円滑になるように、カードや方法を改善した。不審者対応訓練の課題は、不審者の認識、不審者への働きかけと避難指示を指摘された。	安全指導の実施と事故発生時に教職員相互連携による迅速な対応を行っている	A：よくあてはまる (90%以上) B：だいたいあてはまる (80%以上) C：あまりあてはまらない (70%以上) D：まったくあてはまらない (70%未満)	<職員評価>(21) 100% <児童評価>⑱ 95% <保護者評価>⑭ 96%	A	水泳事故発生時マニュアルの連絡体制を見直したことで、役割分担の明確化やより臨機応変に対応ができるようになった。マニュアルは、常に頭に入れておくことが重要なため、見える化や継続的な呼びかけ、定期的な改善を図っていく。また避難訓練時の事前指導の重点を絞り、より分かりやすい取り組み方を提案し、安全指導の啓発を行っていく。
4. 開かれた学校づくりの推進と連携			①教育活動の積極的公開と情報発信(学校便り、学年便り、学校ホームページ等)	教頭	学校ホームページが充実してきた。学校行事の児童の様子や「校長室より」で校長の思いを発信できた。学校・学年便りもしっかりと発信できた。保護者や地域の方が学校ホームページ、学校・学年便り等をよく見ていただいていることに感謝し、これからも積極的な発信に努めたい。学校評価(保護者アンケートや学校評議員評価、学校関係者評価)の結果を公表し、学校の現状と課題について理解して頂き、学校の取組の質的向上に協力を得ていく。	学校・学年便り、学校ホームページ等を通して学校情報を発信している	A：よくあてはまる (90%以上) B：だいたいあてはまる (80%以上) C：あまりあてはまらない (70%以上) D：まったくあてはまらない (70%未満)	<保護者評価>⑮ 97% <職員評価>(23) 100%	A	ホームページの内容が充実してきた。学校・学年便りもしっかりと発信できた。保護者や地域の方がホームページ、学校便り等をよく見ていただいていることに感謝し、これからも積極的な発信に努める。さらに児童の様子などがよくわかるように、内容の充実を図っていく。また、誤字や間違いを防ぐためのチェック体制を充実させていく。
			◎②地域と連携し、太鼓を中心とした地域の伝統文化の継承	教務部	今年度も3地区の虫送り太鼓を地域の方にご指導頂き、練習ができた。5・6年生が、運動会、敬老会、ござっさい祭りで地域の方々に披露できた。また、5年生の道徳授業では、太鼓の指導者の方が作られた紙芝居で伝統文化を大切にすることを育てることができた。卒業式でも太鼓の発表を行うことができた。今後も地域の方々に協力していただき、3地区の太鼓を継承していく。	太鼓の継承を積極的に行っている	A：よくあてはまる (90%以上) B：だいたいあてはまる (80%以上) C：あまりあてはまらない (70%以上) D：まったくあてはまらない (70%未満)	<職員評価>(24) 100%	A	5・6年生の総合的な学習の時間に位置づけて、今後も3地区の太鼓を継承していく。太鼓の指導者の方に協力を頂きながら、今年度は音源や映像などを残す取り組みを進める。また、6年生が模造紙に楽譜を書いて5年生に教えるなど、子どもから子どもへ伝えていくことをより意識して取り組んでいく。
			◎③幼保小及び小中連携の推進(情報交換による相互理解、園児・児童・生徒の交流活動の実施)	連携担当	幼保小の連携で、交流の回数が増えてきた。昔遊び・ランチタイムコンサート・おもちゃまつり・もちつき大会・新1年生を迎える会などの交流は、互いの理解を深め有意義であった。小中連携で、夏休みの部活動体験・11月の津幡中学校訪問(1年生の授業参観)、英語の体験授業ができた。実際の中学校生活を目の当たりにすることや中学校の様子を知ることによって6年生が中学校に向けての心の準備ができていた。	保育・中学校の相互授業参観や情報交換、児童と園児や生徒の交流活動を積極的に行っている	A：よくあてはまる (90%以上) B：だいたいあてはまる (80%以上) C：あまりあてはまらない (70%以上) D：まったくあてはまらない (70%未満)	<職員評価>(25) 100%	A	幼保小連携では、新しく保育園の夏祭りに行われた俱利伽羅お話会に参加することができた。今後、運動会などの行事を、園児・児童の安心につながる活動になるように行っていく。小中連携では、部活動体験から中学校生活への興味・関心を高めることができた。また、職員が中学校へ町歌体操を指導しに行く機会も設けることができた。今後、授業参観等の交流活動から、学びの情報交換にも取り組んでいく。